

島人の記憶にある蛇と雨

令和7年の干支は巳年。利尻島では蛇と大雨が結びついていた。利尻町香形にある北見富士神社の祭典において香具師が蛇を身体に巻き付ける演芸のときに例年になく大雨が降ったことを島人たちは利尻の女の神様が嫌いな蛇が島にきたからだと言っていた。このことは70歳前後の島人たちの幼い頃の記憶による。現在よりも60年ほど前のことと思われる。北見富士神社祭典の大雨が蛇と女神様に繋がっていたのはその時からなのか、それ以前からなのかはわからない。島人の記憶にある神社祭典と蛇と雨と女神様のことは、宗谷バス利尻営業所のバスガイドが利尻島を紹介するシナリオに書き綴られている。利尻島に蛇が生息していないのは島の女神様が蛇を嫌っているからだともある。現在では神社祭典で香具師たちの来島はかつてのような賑わいがなく、蛇やサーカスなどの演芸などがまったく見られなくなったからなのか神社祭典で多少の雨が降っても蛇と結びつけて語られることはほとんどない。主に還暦を超えた島人たちの記憶にとどまっているだけで、若い世代に語り伝えられていないと思われる。

海の道を渡った伝説

現代において利尻島の伝説に出会うのは

近世以降の文献に書き綴られているものだけである。樺太や北海道本島の沼から利尻島が抜け出たこと、道央の山の一部がもぎ取られ川を下って海に出て流れ着いたこと、利尻山と樺太の山が夫婦として繋がっていることである。

利尻島が樺太や北海道本島の沼から抜け出たことは松浦武四郎『西蝦夷日誌』巻之七や『武四郎廻浦日記』にある。『西蝦夷日誌』巻之七の天塩のところに「上に沼長廿余丁巾七丁 其深サしれ難しと。土人の言に、此処よりリイシリ山は一夜に抜出たりと云り。靈有とて土人此沼を崇信す」とあり、稚内のところに『峠エナヲトウゲに至るや神沼周リ八丁 リイシリ島は是

より抜出たりと云て、土人至て尊信して、エナヲを指て通る也」とある（秋葉、1988）。天塩の沼はサラキシ沼で現在は埋め立てられている。稚内のエナヲトウゲの神沼は南稚内の坂の下、龍神沼である。『日本地理大系第十巻日本・樺太篇』には利尻山によく似た形の樺太の突祖山より二里ほど奥のところから利尻山が飛びさり、その跡が大きな沼になっているとある（山本、1930）。『北海道の伝説』には札幌の近くの千歳の近くにあった山がある年の大海嘯でもぎとられて、石狩の長沼にあるサマッキヌプリにぶつかって山を横ざまにねじり倒しそのまま石狩川から海に出て流れ利尻島になったとある（更科・渡辺、1952）。

利尻島の歴史を 民話に紡ぎ創る

新たな価値の創造③

西谷榮治

キーワード アイヌ、語り、記憶、島人、伝説、紡ぐ

利尻山と繋がる樺太の山は松浦武四郎の『武四郎廻浦日記』や『唐太日記』、松田伝十郎の『北夷談』や『日本地理大系第十巻日本・樺太篇』などに書かれている。『武四郎廻浦日記』巻之十五・巻之廿と『唐太日記』下巻にみえるトッソ（近代以降の文献では突阻山）は「其形リイシリによく似たり、依て土人リイシリの婦山（メノコヤマ）なりと云」とある。『武四郎廻浦日記』巻之廿にトウコタンは利尻山の女山で「リイシリの岳と夫婦」、『北夷談』にはトウキタイウツシリは「リイシリ山の女と昔より夷人共申伝へし由」とある。利尻山と直線距離でトッソは300 km以上、トウキタイウツシリは200 km以上あり、樺太にある二つの山から利尻山は見えない。

近世以降の利尻島と利尻山伝説はいずれも利尻島の外界のアイヌの人たちの語りである。海の道を行き来するアイヌの人たちにとって、海上にそびえ立つ利尻島はどのような意味を持っていたのかの疑問が果てなく広がる。

利尻島の歴史を 民話に紡ぎ創る

さて、こうしてみてきた近世以降の史料にみえる利尻島・山の伝説は島の外界のアイヌの人たちの語りである。利尻島の内界において外界の沼や山と繋がるアイヌの人

たちの伝説が書かれている史料に接したことはない。近世末から北海道本島や本州の日本海側から利尻島に渡って来た人たちには、近世のアイヌの人たちの伝説が語り伝えられていない。利尻島の近世のアイヌの人たちのことを知ることができるのは史料だけである。アイヌの人たちが近世をどのように生きていたのかを知ることが、現代を生きる島人の生き方にも繋げられると思われる。近世だけでなく人が住み始めた古代からの歴史的な出来事を昔話として創り、語り継ぐことが歴史の記憶の風化を防ぎ、歴史を知り歴史から学ぶことになるのではないだろうか。その歴史的な出来事から、その時代をより具体的に知り得るものとして1696年5月に利尻島に漂着した8人の朝鮮人のひとり李志恒が書いた日記『漂舟録』がある。池内、1994、1998）。泰山に漂着するまでを要約すると次のようになる。1696年4月13日朝鮮の釜山発船、4月28日寧海を出帆・漂流、12日目山が青い天にそびえ立ち、山の上に積もった雪が白く見える泰山に近づいた、13日目朝、陸地を眺め上陸すると人の住むようなところはなく山裾に臨時につくられた20余軒の草家があり中に鰯と鯨が無数にかけられていた、14日目朝、人家を探すと西の方に煙が立ち上っているのが見えたので進んだ。船着き場から出てきた5〜6人の容貌はみんな黄色い服を着て黒い髪に長

い髭だった、年とった何人かは黒い毛皮をまとい小さな刀をひとつ帯びていた、家の前に棹台があり魚が林のようにかけられ鯨の干し肉も山のように積まれていた、14日目丘に登って四方を眺めて東北側に見えた陸地に小さな海をひとつ越えて船を着けた、泰山と同じような人たちが住んでいた。『漂舟録』にはこのように1696年に漂着した泰山の様子と利尻島と出会ったアイヌの人たちのことが詳細に書かれている。このような泰山・利尻島のことを物語として編むならば利尻島の歴史を史実に基づいて現代に伝えることとなる。そこで大事なことは、「なぜ」「どうして」という疑問を表すことと思う。「20余軒の草家があり家の中に鰯と鯨が無数にかけられて」いるのはどうしてなのか、「鯨の干し肉」はどうするのかなど、疑問を提示することによって状況を思い浮かべ理論的に組み立てていくことが歴史を知ることになると思われる。

四方を海で囲まれた利尻島はいつの時代においても海とともに生きてきた島人たちの歴史が刻まれている。利尻島の歴史を現代に伝え、未来の島のあり方を思うときに、それぞれの時代において海とともに生きてきた島人を「なぜ」「どうして」を組み込んだ民話を創っていくことが未来の島のあり方に繋がるとことになると思われる。必要なのは、利尻の海と島人の民話と島の歴史とを紡ぎ創ることである。